

せ た か む い

発行・古平町史編さん室
文化会館 84212590
第210号・平成19・3・1

年表で読む 古平の歴史

[115]

商工業

②

商業

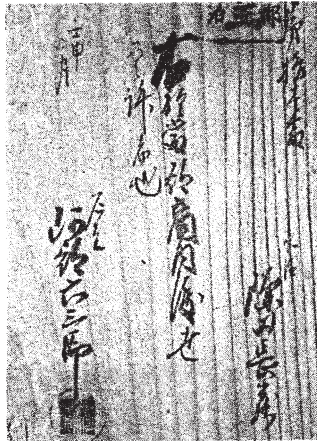
◆明治時代の商業 続く

行商人も売り上げが増えること
によって郡内に店を構えるよう
になり、明治五年頃には通りに商店
が立ち並ぶようになった。

この頃、郡内で商業を営むには名
主の許可が必要であった。

弁財泊(現在の入船町)に永住し
た、酒造業鎌田長蔵の鑑札(明治五
年許可)がある。

← 鎌田長蔵鑑札



策定官番

永住

鎌田長蔵

右於当郡内渡世差許可也

壬申

名主

三月

阿部八三郎 印

◆商店街の発展

鯨漁も好漁期を迎え、漁期には

不漁となった道南方面や、東北地
方からの出稼きの漁夫が多く入り
込むようになり、人口も次第に増
えはじめてきた。

明治一〇年頃から、呉服・荒物・
小間物・雑貨などの商店が相次いで
開店し、戸数三九二戸・人口二一
三四人(明治一〇年)を数えるよう
になった。

主な商品は小樽や本州方面から
仕入れ、これを美国・積丹方面や
行商人に卸していたが、輸送費が
かさむことから、小樽・余市など
と比較して一割から一割五分は高
く、ことに荒物類(主に台所や家の
周辺で使う家庭用品)は二割
ほうき・ちりとり・なわなど)は一割
以上も高かったとある。

海産物は以前から北前船(古平で
は弁財船)とべんさい・べさいと呼ん
でいた)によって北陸・阪神方面へ移出
していたが、次第に小樽港が取引の
中心となり、小樽商人の手を経て
広く本州方面に移出するようにな
った。

古平の物資の価格は、大阪の相場
によって決められることが多かった
が、明治一二年の相場表から主な
ものをあげてみると、

攝津米・加賀米・越後米・庄内米・
秋田米などは七円三〇銭〜七円

九五銭、肥後米八円二〇銭

南部大豆 五円九〇銭

最上小豆 四円九〇銭

鯨・粕二円六〇銭〜二円八五銭

白子 二円八〇銭

身欠き 三円五〇銭

棒 七円二〇銭

三石昆布 九二〇円

雑昆布 三五〇円

明治十二年十月二十五日

兵庫港 木下長右衛門

◆古平仲買人組合の結成

古平の海産物は、町内の仲買業者
の手によって道内外の商人に売り
渡されていたが、それらの仲買業
者は業務の改善や円滑な売買を図
るため、明治二十二年、古平郡仲買
人営業者組合を結成した。規約の
一部を挙げると、

第三条 当組合は同業者の業務を
確実にし、従来の弊習を矯め、商
路を活発ならしめるを目的とす

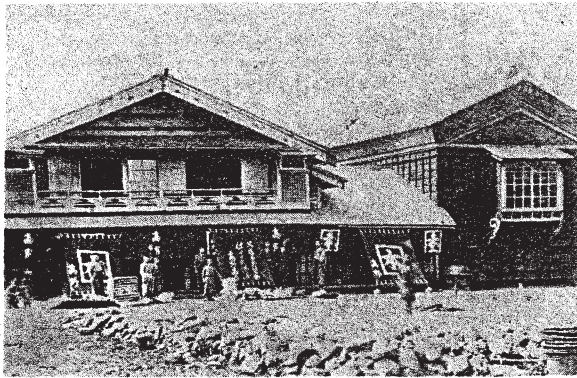
第三十五条 組合規約確守履行せ
しめんため、保証金として一名につ
き金十円宛差し出すべし

第四十条 当組合員にして不正の

ある時は大いに組合の対面を汚す者に付き、組合協議の上厳重にこれらの行為を禁じ、事情によっては協議の上組合より除名する。この場合は除名者に対し一切売買を停止することがある。

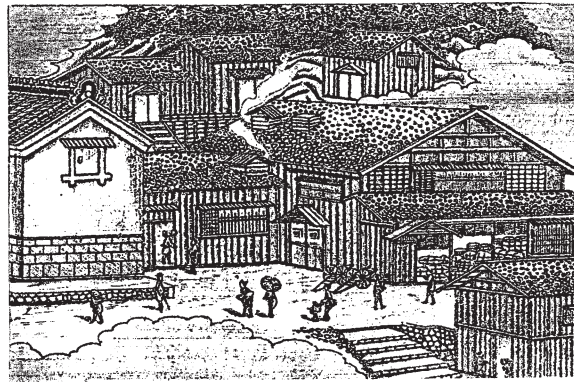
など、厳しい条件をつけている。

また、これらの規定を確実に行うため、各月に行司という名前で担当者を決めていた。



→ 困 高野店 (明治二〇年代)
大正八年五月の浜町大火で焼失して現在地に新築、土蔵は移動した

→ 『後志盛業図録』に載っている
三 幾井舊七宅 (明治二年)



二月セ 新地町 山崎清治
三月本 浜町 高野常吉
四月大 港町 松岡虎之助
五月正 新地町 藤沢勇蔵
六月ヨ 港町 幾井舊七
七月井 港町 小町泰治郎
八月△ 新地町 鎌田金蔵
九月エ 新地町 今井平五郎
一〇月喜 (不詳)
十一月 入船町 広谷順吉
十二月 △ 浜町 仲谷勇治郎

△の稿 次号に続く

後志国古平郡古平港並付近実業人名 (明治二六年)

米穀荒物商	回船問屋	港町	幾井旧七
米穀荒物商	小間物、酒米商	浜町	川村了裕
米穀海産商	回船問屋	浜町	高野平治
米穀荒物海陸物産商		浜町	竹内半平
米穀荒物卸商	回船問屋	浜町	仲谷商店
荒物、米穀商		浜町	長島米蔵
米穀荒物海産仲買商		浜町	名達文吉
米穀荒物海産物委託販売		新地町	藤沢勇蔵
精米一手販売		浜町	藤沢精米所
回船問屋	仲買商	入船町	廣谷伝次郎
回船問屋	水産商、水産業	入船町	廣谷順吉
酒類醸造業		浜町	本間録郎
回船業	米穀海産商	新地町	鎌田金蔵
酒類醸造業		新地町	鎌田酒造店
回船業	米穀海産商	新地町	今井平五郎
旅人宿		新地町	津田清兵衛
呉服太物	荒物商	浜町	高野常吉
呉服太物	和洋小間物、万金物類商	浜町	高野名石蔵
呉服太物	荒物商	港町	成沢平治
呉服太物商		小間物	山口金治
養老葡萄酒	和洋刻煙草類	酒類	化粧品
学用品、売菓、佐渡陶器類		旭屋主	中村源治郎
呉服太物、西洋織物商		港町	佐野呉市
和洋小間物商		新地町	泉 勇吉
銅鉄打物、万金物類		新地町	今井誠一
和洋諸売菓商		新地町	山田喜作
薬種、和洋紙類		新地町	古川慶太郎
和洋菓子製造		新地町	上田駒蔵
回船問屋、水産業		港町	岩井茂平

大正十四年

〜 続 き

▼一〇月二九日

起床七時、今日も天気快晴、一〇月末というのにこんなよい天気も珍しい。農家はいうまでもなく一般も秋始末に大喜びだ。熊さんは早くから農園行き、私も弁当持参で行く。豆落し、ネギ掘りをやる。土地がよく手入れもよかつたので白根の多い上ネギが沢山とれた。あまりよい天気なので、上の畑から長吉さん、忠さん、菊地さんの畑の方まで行つて見る。どこもこの天気で一生懸命やつている。戻つて昼食、後、キク苗の根分け、その他花苗の植え替えなどをする。午後から妻や四郎、悦三らが来て喜んで遊んでいる。夕方、キクの花などをとつて帰る。

▼一〇月三〇日

起床七時、今日も好天気で、こんなによい天気の続くのも珍しい。この天気と道路のよい間に、農園からリンゴ、その他作物を運搬するとして熊さんは一生懸命だ。私は倉庫内で父と共に49号の虫食いなどの選別をする。不作

だった49号は一、三〇〇斤(七八〇*)ほどある。夜、おへ遊びに行きいろいろ話し一〇時帰る。聞けば、父も漁場その他を全部整理し、介へ渡し、

▼一〇月三一日

今日はめでたい天長節、寒空だ

高野孝作さんの日記から

当時の世相を見る

(122)

遊んでいる。子供らもなかなか上手にやるものだ。こんな時代は楽しい。四郎をおんぶして見ていたが風が冷たい。

▼十一月一日

今日は祝聖会の例会日、四時一五分起床、洗面早々に出かけた。寒風で今にも雪が降りそう。三番目であつた。読経の後和尚の部屋で話す。祝聖会の事業

が天気快晴、一〇月末になつたのに毎日のように好天気続き、去る二三日以来九日間も続く。皆喜んでゐる。熊さんは集金に出かけたが、不景気で入金も不足だ。私は今日も倉庫内でリンゴ選別をする。夜は十四日の月が輝く。⑦干場では文治、吉治らの友達が二、三〇人集り、賑やかに先の恵比須神社祭りで余興の、豊年踊りの真似をして

として桐畑と花畑を経営することとを定め、第一に花畑をやることにする。朝食後六人で、鐘つき堂の下の二〇坪ほどの地均しをし午前中に終る。一時から信用組合十周年記念祝賀会に参加する。来賓二〇余名、会員二〇〇名余り、ずいぶん盛会であつた。記念品を貰い四時帰る。目下、一口七〇円、一千口で一四万円、預金一二万円、貸し金五万円

▼十一月二日

起床七時、今日も天気快晴、自転車で行き用足しをし、阿部さんへ刺網の値段を通知する。帰り「ヨ」の山畑まで行つて見ると、老婆と姉がイチゴ畑をこしらえている。万山紅葉を呈し小春日和の如き好天気、古平湾を一望でき実に絶景だ。桐の木もよく生長している。一一時自転車帰る。昼食後農園行き、熊さんと花畑を整理し、支店から貰つたチューリップ、キク苗を植えつける。キャベツをとり、大根を囲つたり秋始末をし五時帰る。

▼十一月三日

起床七時、熊さんと農園行き、ササゲをもぎ柴を束ねる。キクの花は今が盛りだ。昨年支店から貰つたトドマツもよく育っている。昼食後雨が降り出す。一〇日以上も天気が続いたがいよいよ雨になつた。後始末も出来たのでよかつた。夜五時から学校で学芸会あり行く。電気で背景などもよく、舞台も明るくなった。教育もいろいろ変わるものだ。終つて一〇時帰る。

▼一月四日

雨が降り寒い寒気になった。午後五時から禅源寺で禅学会があり行く。折佛師の講話があり、声もよくとお上手だった。九時帰る。

▼一月五日

起床七時、久し振りで海岸を散歩する。ずいぶん寒く遠山には雪も見え、木の葉がハラハラと散りかかる。大謀もこの頃一向に思わしい漁もないとのこと。午前中、湯内からタコ縄用品を買いに来る。午後一時、外套に長靴で新地まで行く。この間までは軽快な自転車で行っていたが、明年四月頃までは使えない。家屋登記をして三時半帰る。アラレが降り寒い。五時から禅源寺で寺参り、禅学会の読経があり行く。本堂は立錫の余地がないほど大勢が集まっている。羅漢供養のあとと会員で修証義を読経す。のち法話を聞き一〇時帰る。ミゾレとなる。

▼一月六日

起床七時、昨日からの寒さは格別、今日は朝から雪が降り風も交えて冬景色となった。家屋

登記の件につき役場へ行く。道路はザブザブし海も時化ている。本年は大謀で小サバも揚がらぬ。ダシにするのに困る。夜、困

主人が小樽から帰宅したので行きいろいろ話す。小樽岡崎行きのリンゴを二箱詰める。

▼一月七日

起床八時、雨が降り道路が悪い。しかし昨日よりは暖かい。店はタコ縄が本年は流行のようによく出る。大謀は漁が思わしくなく小サバもさつぱりようだ。例年なら今頃は沢山のサバなのに、本年はサバの焼干しもこしらえぬ。農園の仕事も出来ない。熊さんと板倉の後片付けをやる。午後から私は農園の桐の木を見回り枝を切つて落す。帰りにキクをとつて来る。夜、妻は「司の姉、困のおっかさん」と寺参りをする。

▼一月八日

荒れた天気も今日は小春日和のような上天気になった。秋始末の遅れた人はこの天気逸すべからずと、畑仕事や冬囲いなどで忙しい。熊さんは農園行き、中畑にこやしをやっている。私は禅

源寺の寺参り、のち困の施餓鬼があるというのでお参りする。二時間も読経があり、終つて昼食をご馳走になる。一時に帰り農園へ行き、熊さんとリンゴにこ

やしをやる。シャツにチョッキ一枚だが暖かった。五時に帰る。

▼一月九日

起床七時半、天気快晴で暖かい。店の片付けをし浜へ出て見る。小サバがようやく少しとれだしたよう。町へ売りに来る。初漁で一〇銭に三〇尾とのこと、イカが一〇〇〜二〇〇とれた。九時頃農園行き、昨日、石村君から貰った花苗、床をこしらえて植え付け、終つて熊さんとリンゴにこやしをやる。三時頃から小雨が降りだし四時頃には本降りになった。キクの花をとり帰る。勇丸で幸治が行き、岡崎行きのリンゴを送る。夜、困支店へ湯に入りに行く。

▼一月一〇日

起床七時半、今日は天気快晴、熊さんは農園行き、私は郵便局へ行き平田へ網代を払い込む。帰途、司へ寄りしばらく話す。ストープはいろいろな型があるが、

「司ではふくろく式を言うと言っている。午後一時から農園へ行き、根回しや肥料をくれる。ずいぶん一生懸命やつたので疲れた。中畑は全部終つたので五時帰る。今日、石河氏の町議補欠選挙がある。原田喜助氏が候補に挙がる、当選するだろう。」

▼一月十一日

起床七時、まだ暗いようだ。天気はよく、大根その他の残っているものを畑から運搬する。私は店番、命日なので和尚さんが来られる。ソイさんの実家から梨一箱送られて来る。子供らは大喜びでいただく。妻は昨日来産気をもよおしたので今日産婆さんに来てもらう。明日日中に出産するだろう。午後三時頃から雨が降り出す。この夜九時頃男子を出産した。先ずは安心。

▼一月十二日

起床七時、昨夜妻は無事安産したので安心した。司、困支店、ソイさんのところへ通知する。昨日からの雨は正午頃からアラレになり海は時化、余市通いも止まる。熊さんは今日は農園行きを休む。妻が安産したのであ

ちこちから喜びの見舞いがある。ソイさんが手伝いに来てくれる。降り続いた雨も夕方にはおさまり、海もだんだん静かになり、空には星も輝いた。明日は天気にならない。

▼一月一三日

起床七時半、妻も今日で産後の肥立ち、順調に経過しているの幸いで何よりだ。熊さんは農園からキャベツ、その他の収穫物の運搬をする。ソイさんは今日も手伝いに来てくれる。

▼一月十四日

起床七時半、天気快晴、農園の柴を板倉に入れるべく九時頃出かけた。十時頃(太)から岩糸の注文があり、私は店へ戻って回漕店へ出す。昼食後、また農園へ行きリンゴの樹の囲いをしたり、花をとって四時に帰る。妻は今日で四日目だが母子共に壮健で肥立ちもよろしい。夜、(困)へ行き赤児の命名を依頼して帰る。

▼一月十五日

今日は祝聖会の例会日、四時一五分起床し出かけたが町はまだ真つ暗、第一着であった。続いて北浜君、松岡君が来る、和尚

は沖村に葬式があり不在、読経後台所の焚き火にあたりながら、一時間ほど話して七時に帰る。六時頃から雨が降り出しなかなか止まぬ。今日は赤児の巣上がり祝い日、白玉やら酒肴を出して産婆さんや来た人に馳走する。これで先ず一段落だ。

▼一月一六日

起床七時半、朝夕は寒く雪がチラチラ降っている。カレ網、タコ縄などの客がボツボツ来る。赤児(困)主人に相談し「正治」と命名した。山下さんの二三歳の男子、不快のところ昨夜死亡とのこと、尋常科六年で秀才とのこと、惜しむべしだ。山下さんの通夜に関口さんのところへ行く。雨後で道路が悪い。八時帰る。

▼一月一七日

起床七時半、熊さんは沖村(一)で戸障子の売り物があるというので自転車で見に行く。私は山下さんの葬式送りに行く。関口さんの畑をあちこち見て回ったがずいぶん広い。一時出棺す。今日は快晴で暖かく外套を着なくてもよいほどだ。夜、(困)へ行き話をする。

▼一月一八日

起床七時、今年は割合暖かく秋始末には好都合だ。今日も快晴で道路も乾く、本年はもう乾いた道路は歩けぬと思っていたが珍しいことだ。店はタコ縄や針、アバ縄がボツボツ売れる。妻は今日で八日目、一日増しに良くなる、子供も壮健で何よりだ。

▼一月一九日

起床七時、まだ電気がついていいる。この頃の日の短いこと、四時には電灯がつく。今日も幸いに好天気で暖かい。小春日和で道路もカラカラだ。自転車も本年は特別によい天気が続くので乗れる。私は裏の薪入れをやる。安産祝いの人がボツボツ来られる。タコ縄用アバ糸などが売れる。

▼一月二〇日

昨夜来の雨は今朝も休まずに降っているが暖かい。布団を着ていて暑いくらいで、一〇月頃の気候のようだった。いつまでも雪が降らず薪炭が経済になりよいことだ。この頃あちこちからウルシ(漆)アバの申し込みがある。

▼一月二一日

今日も天気快晴、一一月末に

なれば例年なら初雪が降る頃なのに、まだ道路は乾いている。店はタコ縄用品が売れゆく。正治も妻も別状なく日増しに肥立ちがよろしい。小サバもボツボツとれ、一〇銭に四〇尾とかで売っている。夜、(困)へ話しに行く。聞けば中末司さん、かねて腸チブスで療養中のところ、養生かなわず本日死亡したとのこと、前途ある身実に惜しむべしだ。令さんの不幸続きまことに気の毒なことである。

▼一月二二日

今晩三時頃からにわか暴風雨になり、家の中にいても恐ろしいようだ。早く夜が明ければよいと念じていた。七時起床、まだ電気がついていて薄暗い。日が短くなった。浜へ出て見る、時化で千トン級の汽船三隻が避難している。九時頃から雪がチラチラ降りだし山も町も真つ白になった。いよいよ冬だ。タコ縄準備でアバも売れる。夜、大へ遊びに行く。いろいろ話し一〇時帰る。

▼一月二三日

昨夜から降り出した雪は、今曉起きて見れば一寸も積もつて

いて一面の銀世界、いよいよ冬景色となった。子供らは雪ダルマをこしらえたと戸外で遊んでいる。今日で二日間続けて学校が休みなので家の中は賑やかだ。正治、日増しに壮健に育ち、産婆さんは毎日湯をつかわせに来ている。タコ縄許可になったというので忙しい。夜、^⑤へ福縁ストープを見に行く。帰ってから四郎を連れて支店の湯に行く。

▼一月二四日

起床七時、昨夜は小便に三回も起きたのに、それでも四郎はタレてしまった。雪が降っているとこゝろへ今日は雨で、道路はグチャグチャになってしまった。倉の片付けをやる。

▼一月二五日

起床七時、寒さは日増しに加わり朝から雪がチラチラ降り出す。店ではタコ縄用品が売れゆく。子供にもこの寒さで冬支度、ダルマ長ぐつになった。妻も日増しに元気になり、コタツに入つて針仕事をしている。

▼一月二六日

起床七時、朝から時化模様、寒さも厳しく吹雪きになり、全

くの冬景色となった。この分だと根雪になるかも知れぬ。月末になったので目録書きをやる。夜に入り吹雪ますます甚だしい。中村床屋で散髪する。

▼一月二七日

起床七時、この頃四郎をだつこして寝ているので、一夜に三回起こすのはなかなかゆるくない。天気は快晴、今日もタコ縄のほか手繰り綱などの客もあり、店は一日中忙しかつた。寒さは厳しいが天気はよい。夕方浜へ出て見る、上ナギで、十二夜の月が光々と輝いている。

▼一月二八日

起床七時、この頃は四郎と悦三の小便に起きるのでなかなか眠られぬ。母親の命日で和尚さんが来られ読経する。母が逝きて早六年だ。天気快晴で小春日和のよう、港町の姉も来られた。夜、^⑥へ行く、支店兄さん、加瀬さんらもおり、いろいろ時事について話す。

▼一月二九日

起床七時、まだ電気がついている。この頃の日の短いこと、昨夜からの雨、今日一日中降っている。

道路は雪が降つてソリが使えませんが、この雨でまたグチャグチャだ。月末で熊さんは集金に行く。

▼一月三〇日

起床七時、妻は産後の肥立ちもよく一日増しに回復している。正治も変わりなく成育しつつある。皇孫殿下の出産、全国民一日千秋の思いで待っているがまだ吉報に接しぬ。一月末日までの診断も当てにならぬのか。一日中雨風激しく時化となる。夕方浜へ出て見る、沖は白波が立つて矢来まで波が上がつている。

▼二月一日

今日は祝聖会の例会日、四時半に起床、四時五〇分まだ早いのか誰も見えぬ、境内をあちこち歩いていたら松岡君が来た。間もなく佐久間さんが来る。五時五〇分、読経が始まる。一時間早かった。かなり寒い。六時半に終り和尚の部屋でいろいろ話し九時帰る。今日は正治二十一日の祝い日、赤飯の馳走で妻やコノさんは忙しい。熊さんは配達役だ。今日も時々雨が降り海は大時化だ。久し振りで風呂に入る。気持ちよい。

▼二月二日

起床七時半、日が短くなった。雨が降り秋のようだ。道路が悪い。午後久し振りで銀行へ行く。帰りに^⑦に寄り福縁ストープを見たが、なかなか燃えもよく暖かい。四時帰る。落葉松を積む汽船が入港している、明日から荷役をするとのこと、夕方からナギ模様になる。夜、今城さん死亡し通夜に行く。十七夜の月光が輝く、続いていた荒れもようやくおさまったようだ。

▼二月三日

起床七時、この頃の日の短いこと甚だしい。昨夕来時化もおさまつて、今日は落葉松の丸太の船積みが始まり舳(はしけ)で荷役している。一〇時、今城さんの葬式送りに行く。午後、美国の^⑧さんが来て昼食を出しいろいろ話す。美国も不況とのこと、二時頃から雨に風を交えてまた時化模様になつてきた。二九日以来、昨日一回だけ余市通いが出たきりで今日また止まった。こんなに長く荒れたことも珍しい。若林さん久し振りで来られ話をする。

(続く)

町内の 学校探訪

明和小学校

◇明和尋常小学校独立

昭和一六年二月一九日、鴨居木分教場は、部落民の長い間の念願であつた古平尋常高等小学校から独立して、明和尋常小学校と改称した。

独立校となり、分教場主任であつた森晴夫訓導が初代校長に就任した。

明和小学校となり、最初の卒業生は次の一三名であつた。

- 一、木村秀逸 二、鶴谷勝雄
- 三、工藤義雄 四、打越勇
- 五、池田直彦 六、山崎利雄
- 七、鶴谷石光 八、木村辰雄
- 九、佐藤フミ 一〇、原田スミ
- 一一、内山モミ 一二、依田凉子
- 一三、村上加千代

この年、戦時下であつたことから国民学校令により、四月一日から明和国民学校と改称した。

昭和一八年一二月、児童数の増加により二学級編成となつた。
(在籍児童数六五名)

◇新校舎落成

やがて終戦となり、学校の改革により昭和二二年四月、明和小学校と改称した。学校にはこれまで門柱が無かつたので、PTAで資材を提供し、同会員の勞力奉仕によつてコンクリート製の門柱を建立した。

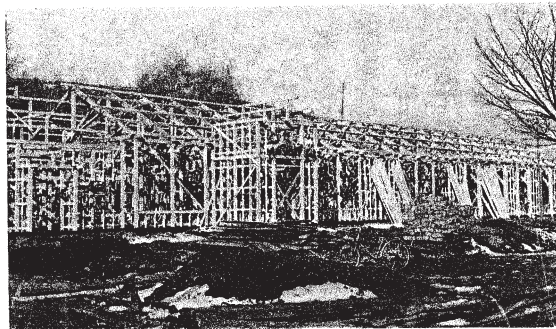
学校では附近にも電話がないことから、町に電話の架設を要望



↑明和国民学校校印

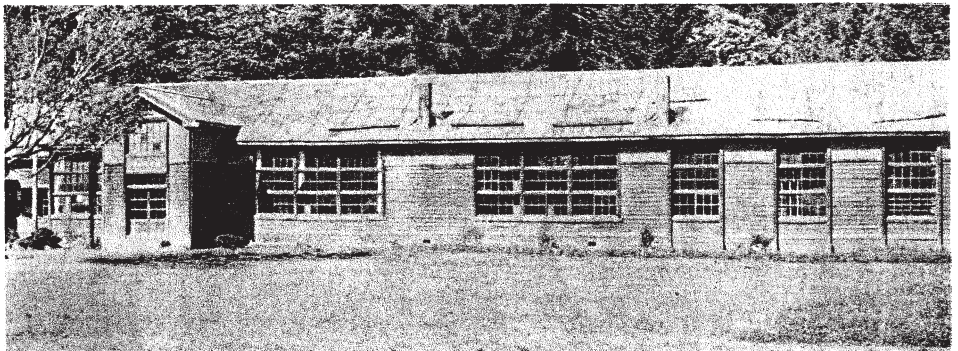


↑明和小学校校印



↑上棟式が行なわれる

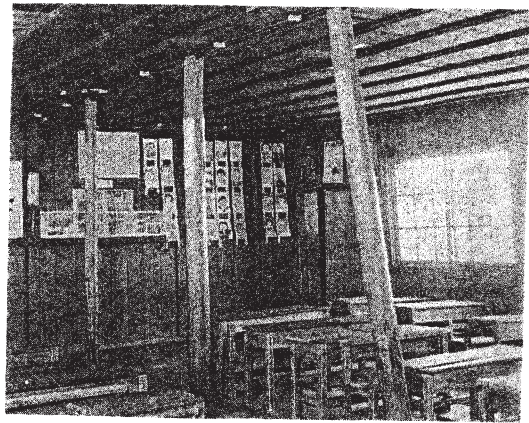
していたところ二三年五月、部落共用として電話「五一番」が新設され、学校を中心とした校下の三部落の連絡網ができた。この電話は二六年五月から学校専用となつた。



↑児童はもちろん部落民も待望の新校舎が落成

前年赴任して来た渡辺文吾校長は、昭和二四年度卒業式における学事報告の中で、
「一、学校経営概略について

←倒壊寸前? 教室に立てられた天井を支える柱



倒壊寸前のこの古校舎を、如何に明るく整えられた環境にすべきか、これが森前校長の後に赴任して来た私に与えられた課題であらうと思うのでございます。

—以下省略—

と、新校舎建設への強い決意を述べている。

校舎は今までの新築、増築は共に古材を使って建設されたものであり、長年月が経って破損や腐朽が甚だしいことから、昭和二五年に新築が決定し、八月に

校舎を解体、新築に着手した。

それに先だつて四月から、PTA会員や部落住民が馬も使役し、学校前のグラウンドの拡張、地均し作業などに延べ七日間ほどの労力奉仕をし、新校舎建設へ向けての部落挙げての熱意がみなぎっていた。

しかし、折から朝鮮動乱が勃発したため資材が急騰したが、翌二六年四月一日、喜びの新校舎落成式を迎えた。

この間、地域には全児童を収容できる適当な場所が無かったため、在校生は分散して授業が行なわれた。一、三、四年生は移設した仮教室、二年生は校長住宅、五、六年生は熊野神社と分けたが、熊野神社は冬の寒気が特に厳しく、それで仮教室の児童と交互に授業をした。

校舎の総坪数(校長住宅を含む)は一四五・五坪で、二教室三五坪、運動場四五坪などであった。

また、落成式に合わせて四月一五日、創立四十周年記念式が行なわれ、席上、明和小学校校歌が発表された。

明和小学校校歌

作詞 飯田松太郎

作曲 工藤富太郎

一、(朝の窓)

海青く 空は晴れたり

風さわやかに 希望を呼ぶ

あゝ明和 わが学びや

二、(夕べの門)

三、(学びの道)

(二、三番省略)

新校舎の落成と共に新学期が始まった。

創立四十周年記念式では、鴨居木特別教授所設立に努力し貢献のあつた五名に、学校長から感謝状と記念品が贈られた。

故中野和藏・故木村彦松

佐藤吉助・工藤富五郎

金沢金之助

感謝状

(氏名)

本日明和小学校の盛運を見ましたことは君偏に鴨居木特別教授所創立以来尽瘁された功労大なるものと思ひますので明和小学校創立四十周年記念の式典に際して記念品を贈呈し謹んで

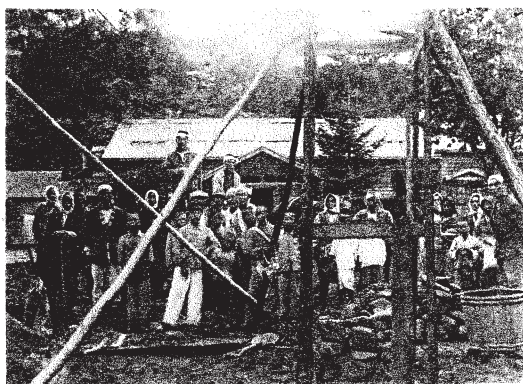
感謝の意を表します

昭和二十六年四月一三日

北海道古平町立

明和小学校長 渡辺文吾

校舎の新築に続いて翌年、教員住宅二戸建一棟を学校前に新築した。



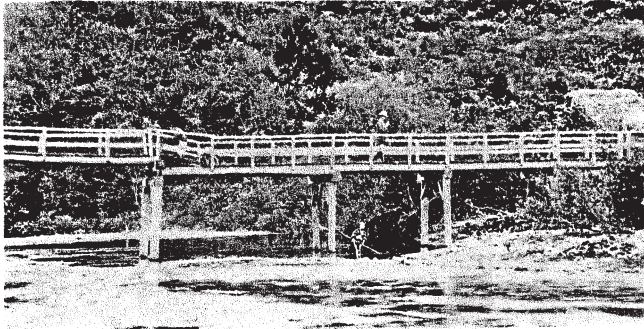
→明和小学校となり部落民の手でコンクリート製門柱を建設

この年五月、泥の木青年団では校庭の周りに木柵を設置した。また、木村藤吉が寄贈したカラマツ一六〇本を四年生以上の児童とPTA会員が、四反余りの学校

林に植樹した。

先に泥の木青年団が建設した国旗掲揚塔が、昭和二九年九月の一五号台風で倒れたが、翌三〇年六月、榎本伝蔵が丸太を寄付し、青年団の手によって建て替えられた。

昭和三〇年七月、強風をともなつた豪雨が襲来し、古平川が増水して廻り淵橋が流失し、四、五日と学校は臨時休校をした。廻り淵橋から上流の住民や稲



↑ 古平川の溪流にかかる流失前の廻り淵橋

倉石との交通が出来ないため、六日になり役場では急ぎ渡し舟として小舟を用意して間に合わせた。

◇ 創立五十周年と閉校

昭和三五年八月、創立五十周年記念式典が行なわれ、音上校長作詞の賛歌が歌われた。

明和小学校

五十周年をたたえる歌

作詞 音上正雄

一、大森林にいどみたる

開拓のくわとおくして

汗にまみれし八十余年

ああ先覚の大偉業

(二・三番省略)

◇ 古平小学校に統合

昭和三九年、古平小学校の新築校舎の落成により、町内の明和・沖小学校と新地分校が古平小学校に統合することになった。児童生徒数が次第に減少したこと、それにもなう学校運営上の諸問題をかかえ、全国的に学校統合の方向へと進んでいた。学校統合反対の声も起きてい



↑ 新校舎落成記念母親の記念撮影

たが、町内では小規模校の解消、整備された学校環境での教育を念頭に古平小学校の新築が推進されていた。早くからの父母や地域住民との懇談などから、統合問題はほぼ円満に解決した。明和小学校も明治四三年、鴨居木特別教授所として創立以来、地域の住民と共に歩んできた五四年の校史をここに閉じることになった。

(この項終り)



→ 創立五十周年記念祝賀会
役員一同
← 第六学年卒業記念
(昭和二年三月)



(写真・佐藤一郎さん提供)

雪下駄とわたし

大 澤 文 子

珍しく穏やかな新年を迎えさ
すが亥年……と謳歌していたのに
……。めくる暦が「小寒」を告げ
る頃には連日の雪、雪。立春も
過ぎホッと息づいたころ、私は
床に伏す事数日。

まあ昔から「風邪をひかぬ者
はバカ……」という古い言い伝え
さえあるので、「少しは利口者
になったかなア」と熱に浮かさ
れながら満足してはいたが、ペ
ンを離すことはなかった。

ベッドから天井のうすい染みを
見上げ、うつうつとしていると、
わが窓を暗め地響きをたてなが
ら過ぎゆくはなんの車か……。

ふとそんな時、夢心地に思い
出すのは凍て道をキュッキュッ
とリズムカルにきしませ歩く雪
下駄の音、現在では和服姿に雪
下駄を履き、優雅に歩く女性た
ちをあまり見かけることもなく
なつたが、たまにはお稽古ごと

に通うのであろう、優雅なお召
しものにコート、そして雪下駄
の中年の女性を見かけることは
あるが……。つい声をかけたくな
るのも年毎にふえゆくわが年齢
のせいかなと苦笑せざるを得な
い。だが、私は意外と雪下駄が
すきだった。自分の好みの鼻緒
をたててもらい、兎の白い毛で
あろうものをつま皮につけても
らつた雪下駄を履き、キュッキ
ュッとリズムカルな音をたてて
歩く快感は素敵だった。

そうそうあの頃、突然！ 父
の教え子と言われる宮田先生が
父の所へ来られ、
「ピアノの先生がいないので……
是非！」とのこと。

ただちに私は幼稚園の先生の資
格を取得し、札幌市の幼稚園に
五名の先生方と勤務することにな
つた。

昭和初期の頃には、ほとんど

和服のみだった。私は小花模様
の錦紗の着物、それに母の手製
の紺の袴を身につけ、百数十名
の園児と五名の先生方と共に過
ごした幾数年。

札幌の朝夕の雪道はお定まり
のひどい凍て道。毎朝毎夕キュ
ッキュッとリズムカルな音をた
てて通つた楽しみ、勝手に二拍
子の歌のふしを雪下駄と共にう
たい、寒い冷たいあの頃の冬の
道を勤務のために通つた数年……
若かりし頃の何ものにもかえが
たい心の支えであつたろう。あ
の頃はまだまだあまりテレビ放送が
普及されていなかったもので、ラ
ジオ放送局からたびたび出演を
依頼され、園児らと共に出演し
たことも幾度か……。新聞紙上の
ラジオ版に「指揮者宮田先生」
「ピアノ伴奏今井文子」の記事
をスクラップに貼つておいたが
時折り眺め、
「あの頃は若かつたなア」とひ
とり呟く。凍て道を歩く時のあ
のリズムカルな雪下駄の音、冬
の雪道を勤務のために通つた数
年、何ものにもかえがたい心の
支えであつたろう。

ああ、そうそうあんなことも

あつたなア……。私は習い事のた
め、寒い日の午後、特に凍てが
ひどかったが小路を歩いてい
た……と、私の前を茶のシヨール
を肩にかけ、小袋を振りながら
キュッキュッと雪下駄をきしま
せ歩くお年寄りに出会つた。

私の気配にふと振り返るとかる
く挨拶された。凍て道だつたの
で私はあわててお年寄りにそつ
と手をかけた。

「今日はねえ、おじいさんの命
日なのでねえ、お寺へ行くんで
すよ。いつもはねえ墓参をはく
んですけどねえ、今日はしばら
くぶりに着物を着てみたのでね
え、雪下駄を履いてみたんです
よ」

とにこやかにほほえまれた。

「よくお似合いですよ、でも
ね、気をつけてネ」

ふたことみこと声をかけると腰
をかがめ、「ありがとうござい
ます」と挨拶をされ、再びキュ
ッキュッと雪下駄の音を軋ませ
街角を曲がって行かれた。

「気をつけてネ」

私は言葉にならぬ溜め息をつき
街角にむかい、いつまでもいつ
までも……手を振っていた。

古平と私 愛犬コロのこと

葛 西 庸 三

古平転任した時、家族は妻と息子と愛犬コロがいた。

南京極小にいた時、住宅近くの農家に小犬が二匹生まれた。息子と私は駆けつけた。茶色の愛くるしい二匹が、よちよち歩いてた。

息子が、欲しいな、飼いたいな、と言った。すると農家の方が、欲しかったらどちらか一匹あげるよ、と言ってくれた。

——父さん、貰ってもいいしよ。

息子の真剣な眼差しを見ながら、幼少の頃犬を飼って楽しかった昔を偲び、私は息子の気持ちがよく解るのであった。

——だけどさ、お母さんが何と云うかな。

息子は泣きそうな顔をした。

帰り道、私は息子に秘策を伝授した。いいか、お母さんに頼む時、ぼく、絶対責任持つから、つて言う

んだぞ。駄目だ、と言われても、何遍でもしつこく言うの、いいか。

家に着くや否や、

——お母さん、ぼく、絶対責任持つから、小犬貰っていいしよ。

と息子は眼を爛々と耀かせて言った。

——駄目。何をかつても三日坊主だから。

冷たい言葉が返ってきた。

その日から息子の訴えは毎日続いた。

——どうだ。俺も面倒見るからさ。飼わせてやれよ。

私も助け船を出した。息子は勢いついて食い下がる。

——私は知らないからね。あんた達二人で絶対責任を持つんだよ。

約束だからね。

根負けして妻が言った。

許可をもらつて息子と私は、早速

犬小屋を作り、一か月過ぎた頃、顔の愛くるしいほうの一匹を貰ってきた。

小犬は玄関の前の小さな坂をよじ登つてはごろげ落ちた。何回も繰り返した。その姿がとても可愛かった。だからコロと命名した。

約束があるので、息子は一生懸命コロの世話をした。住宅の前がグラウンドだったので、夜はコロの運動場になった。

古平に来た時、コロは三歳になった。

息子はすぐ野球少年団に入り、放課後は玄関にカバンを放り投げてユツォームに着替えてグラウンドへ走つた。帰りはいつも日が落ちてからだった。

私もなんだかんだあつて、いつも帰り道は遅かった。

つまり、何時の間にか、コロの世話はすべて妻にしわ寄せされた。

飼い主は妻となった。

夜遅く三人で食事をする時

——とうとう、私の言つた通りになつたでしょ。二人共、コロの面倒、何も見ないんだから。約束が違ふでしょ。

妻は口を尖らせ私と息子を睨みながら言つた。二人はそつと顔を合わせながら、肩をすぼめて小さくなった。

コロは古平へ来てから、遅しく成長した。住宅の横は壁になつていたので、その縁に太い針金を長く張つて運動できるようにした。

古平へ来て半年が過ぎた頃から、私が車で校門の坂を登りかけると、小屋の中にもコロはとび出し、吠えながら走り回つた。

そのうち、まだ私の車の姿の見えないうちから、コロは鳴きながら尾を激しく振るのである。いろいろな車が何台も校門の坂を往き来するのだが、絶対に吠えない。

どうして、家の車だと分るのか、と妻と話し合つた。エンジンの音で分るのではないの、と妻は言つたが、真意のほどは分らなかつた。しかし、私のコロへの愛情は一層深まつた。

コロはその後、余市、島牧、寿都と歩き、昭和六十三年の秋、十三歳で死んだ。私と妻は、日本海が見える寿都の高台に埋葬し墓標を建てた。飼い主の眼は真つ赤であつた。

浜を待つ人



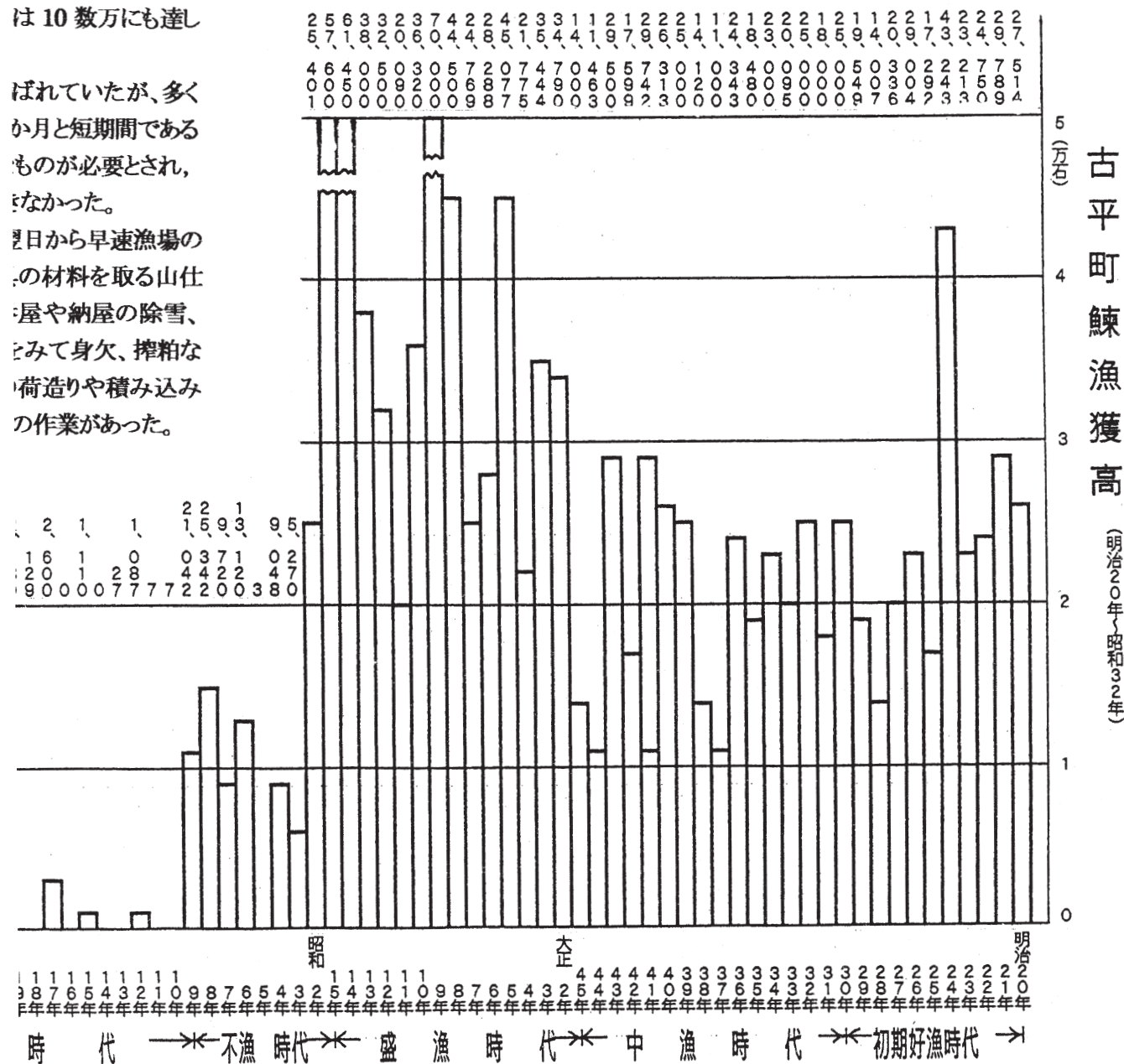
<春告魚> と呼ばれる鯨

サテ ~ 今年は各地からどんな

鯨の便りが聞かれることでしょう

くの労働力を必要と
から始まった。古平
えるヤン衆と言われ
は10数万にも達し

ばれていたが、多く
か月と短期間である
ものが必要とされ、
なかった。
翌日から早速漁場の
の材料を取る山仕
屋や納屋の除雪、
をみて身欠、搾粕な
荷造りや積み込み
の作業があった。

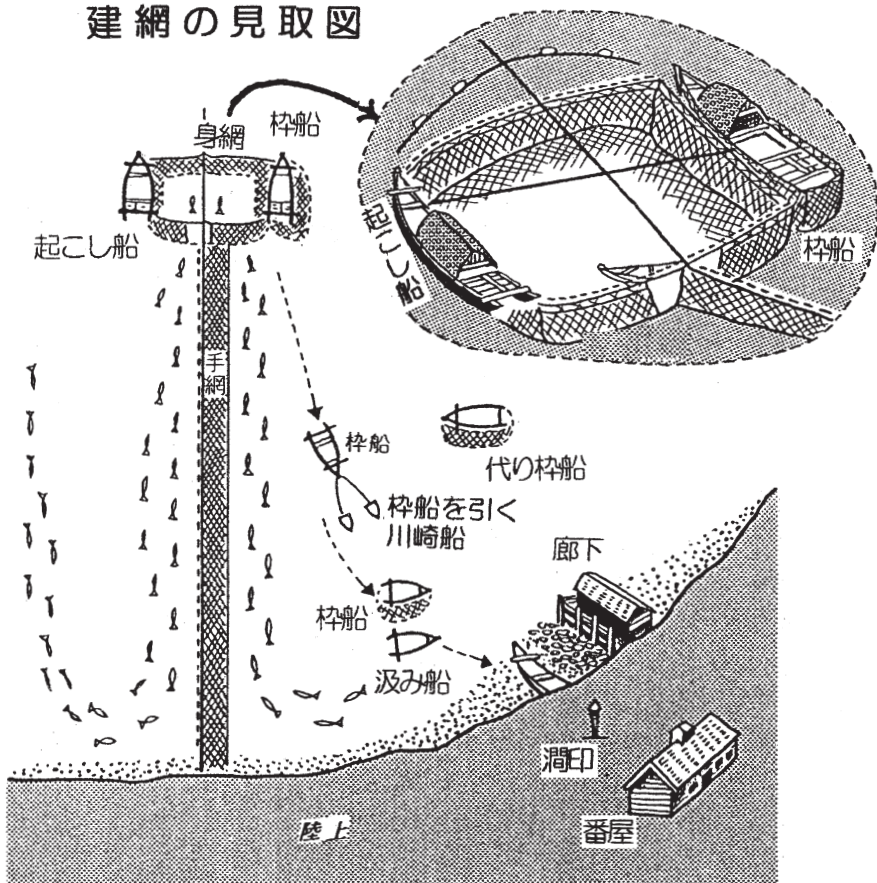


蝦夷地と呼ばれていた頃から北海道のにしん漁は始まり、産業として最も早く経営が確立され、北海道はもちろん日本の経済にも大きな影響を持っていた。水産業の中でもにしん漁は、その後、農業に首位を譲ることがあっても水産王国北海道を代表する地位にあった。

古平郡内での明治 7 年～10 年の建網図を見ると、97 か統(97 か所)以上の建場(漁場)があったが、にしん漁獲量の急激な減少とともに、かつてのにしん漁による繁栄も今では語り草となってしまった。

にしん盛漁期の頃は、年明けと共ににしん漁場の親方連は落ち着かなくなる。早くから信仰する神社仏閣への祈願、伝統的な占い、漁場の禁忌、後には水産試験場からの調査報告などなどに一喜一憂するのだった。それというのにしん漁は、明治から大正期にかけてはある程度の漁獲は期待できたが、同じ郡内でも運不運が伴う不安

建網の見取図



余市水産博物館編「にしん漁撈」より

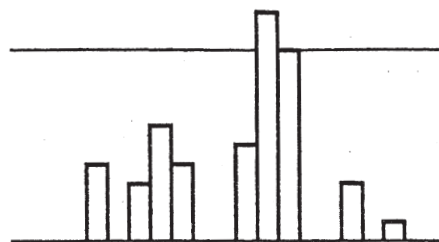
定な漁業でもあったからである。

にしん漁業は短期間に集中して多くの労働力を
したので、先ず労働力を確保することから始まっ
ても最盛期には千数百人はゆうに超えるヤン衆
る人達が入り込み、道内では多いときは10数万
たといわれる。

漁場に来た漁夫達は「神様」とも呼ばれていた
は3月上旬から5月下旬までほぼ3か月と短期
が、そこに集中される労働力は膨大なものが必要
とても地元の労働者だけでは対処できなかった。

到着した漁夫達は翌日から早速準備が始まる。漁具の材料を取
り、漁具の修理、番屋や納屋の
最盛期には合い間をみて身欠、
どの製造加工、その荷造りや種
などにしん漁場特有の作業があ

$\begin{array}{ccccccc} & & & & 1 & 1 & 1 \\ & & & & 4 & 1 & 0 & 2 & 2 & 1 \\ 3 & 2 & 5 & 4 & & & & & & \\ 2 & 9 & 8 & 9 & 1 & 2 & 8 & 9 & 0 & 1 & 1 & 6 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 5 & 0 & 8 & 2 & 8 & 6 & 8 & 2 & 0 & 1 & 2 \\ 0 & 0 & 0 & 9 & 0 & 9 & 0 & 2 & 0 & 0 & 0 & 3 & 0 & 9 & 0 & 0 & 0 & 7 \end{array}$

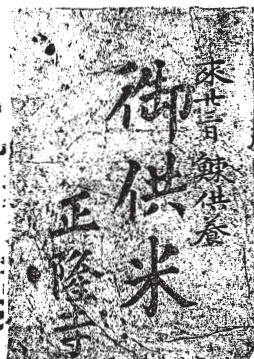


3 3 3 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 1 1 1 1 1 1 1
2 1 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4 3
年年年年年年年年年年年年年年年年年年年年

代 理 漁 區 一 下

大漁を期待して 活気づくにしん漁場

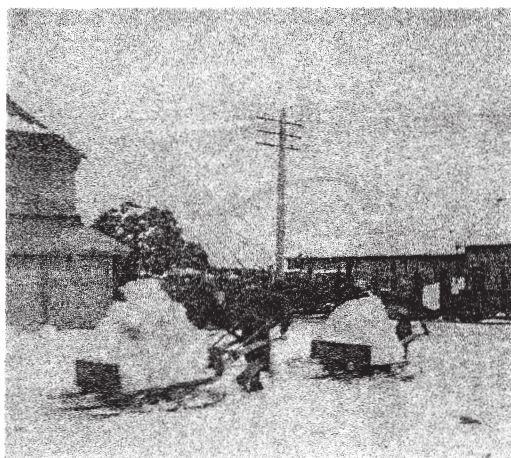
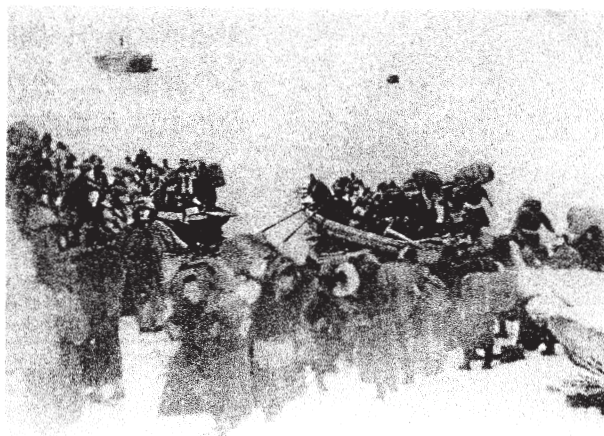
鮎
供養
禪
源
寺



↑ いよいよ網おろし 鮎漁場恒例の行事で、漁労の準備万端完了した3月末の吉日に行なわれる。大漁祈願、海上安全祈願をし、お国自慢がでる祝宴

↑ 大漁祈願をし、袋に入った供米を受ける

↓ ヤン衆と呼ばれる人達が思い思いの服装で、寝具などを携え、専用の汽船から浜に降り立つ。場所は沖村海岸とある。



↑ 3月ともなると冬ごもりから覚めて漁場は一齐に躍動する。漁場の雪引き作業 ① 山口漁場

(※次ページより続く)
しが強く海上も荒れやすく、冬將軍の襲来も間近いので、その猛威からの防備対策に忙しくなります。十二月になると、海が凍らない前に漁業も切り揚げ漁船も上架して冬眠に入ります。先に上架して休業したわが家の発動機船も点検し、異状の無いことを確認して安心しました。使用不能と申告したので、国営漁場も沿岸警備隊も諦めたものと考えられます。春が来ればまた新しい道を考えることを楽しみにします。

これという仕事もないので映画館で洋画を観たり、友人宅やわが家で麻雀をして退屈をまぎらわしていました。年末になりましたが昨年のような漁業者の強制労働の通達も入らず、いい正月を迎えられそうだと思っていた矢先、ついに樺太引き揚げ近々開始予定の朗報がラジオで発表されました。



— 続く —

戦中 中彈

泣き笑いの
樺太漁場体験記

戦後 後彈

吉野 慶一郎

野球をやらないソ連人が抑留者の日本人のためにグラウンド提供に尽力され、誇り高いスポーツ精神で温かく包容してくれた、名も知らぬ紳士に出会えた幸運と喜びをただ感謝するばかりでした。

昨年の秋の白樺楽団結成で時の警備隊長の絶大な援助を受け、盛大な演奏会ができたことと重なり合い、音楽やスポーツに国境はなく、いつ何処でも誰とでも仲良しになれるのに、国と国はなぜ戦争をするのか理解に苦しむ現実です。お陰で自分たちは短い間の出来事でしたが、国境のない平和な街道を気持ちよく歩かせてもらったことは夢のような嬉しさでした。

野球大会の後、女子中学生はバレーボール部をつくり、ソ連

人の指導を受け、ソ連人の中にも野球の好きな人たちは野球を教えて下さいと仲間に入り、スポーツ交流の輪が広くなり、町は明るさを増してきました。

振り返りたくないまいし敗戦のショックと共に、横暴なソ連に翻弄されるがままの悲憤の日々を重ね、今日まで助け合い生きてきた日本人にもようやく元気が出てきました。しかし、常に耳を傾けていても日本のラジオ放送には樺太島民の引き揚げに関するニュースや話題は入ってはきません。他の外地からは次々と帰国しているらしいのに、樺太はどうなるのかと不安は尽きません。いつの間にか山野も街も鮮やかな秋景色に彩られ、故国の風景が思い出されます。さらに秋も深まり菊の

花が薫る明治節の頃になるとソ連人が待ちこがれている『革命記念日』の大祭がやってきます。ソ連人は喜々として町を清掃しロシア風の色彩で飾り付け祭り気分を盛り上げます。

目立つ場所にはスターリンの大きな写真が飾られます。本来なら革命の父と言われるレーニンの写真を飾るべきところ、レーニンはどうなっているのか、この光景を天国のレーニンはどんな顔で眺めているやらと考えさせられます。独裁者スターリンの専横の一面を見せられた思いです。

祭りの当日は大きな赤旗と共に軍人や一般人のパレードが賑やかに町を行進し、式典会場の校庭に集まり、祝辞や講演をはじめ型通りの順序で最後に万歳を叫んで散会です。

これからがソ連大衆の祝宴と芸能会が幕を開けます。本通りのそちこちにグループごとに場所をとり、祝宴をあげては音楽、歌、ダンスが始まり、老若男女が日頃の苦しさから解放されたように、晴々した気分浸

っているのが分かります。

音楽も歌もダンスもとても素人芸とは思われない芸術性に富んだ演技に魅了されます。さすが文化の古い伝統を継承しているロシア人の血の流れに接した思いで、感動しながら見物していました。この日は無礼講と聞きました。この日は悪酔いした人や喧嘩もなく和やかな一日でした。

私たち日本人にも『タワリシチ ヤポンスキー』（同志、日本人よ）一緒に飲んで下さいと声をかけ腕を引かれてる人もいました。

ソ連大衆はこちらが考える程日本人を敵視してはいません。常に好意を示してくれることに感謝するようになりました。祭りはさらに盛大に続き、ソ連人の家庭の窓からは明るい灯火と笑い声がもれて賑やかでした。夜の更けるのも知らずに……

翌日は早くも華やかな飾りは外されて街は元の姿に戻り、祭りの後の空洞のような侘しさが心に残るのでした。

十一月も半ばになると木枯ら（＊前ページ4段目へ続く）

あ と が き

この手記は、半世紀前の私の一ラッパ手としての軍隊生活を記したものです。

戦争の体験者として、その数少ない生存者として、あの悪夢のような惨憺を極めた戦争の真実を、また、貴重な戦争体験を風化させないためにも記憶をたどり、子供や孫達に正確に書き残して置きたいと思いつつ、いつの間にやら四十七年間に過ぎ去りました。

私にはこの四十七年の歳月は決して短いものではありませんでした。何とか手記をまとめようと思つてはいましたが、仕事の忙しさ、資料不足、行動年月日の不正確、記憶の曖昧さなどが重なって、これらが行く手を阻んでおりました。

平成四年、古稀を迎えたのを機に一念発起、やってみよう！という気になり、手記に取り掛かり、自分でワープロを打って製本までやる。随分と手間の掛

かる仕事でしたが、心のこもったものを作りたい、その一心で始めました。

この間の半年間は資料の入

老兵の綴り方

あ、樺太国境守備隊

橘 義 春 [遺 稿]

手、メモの整理、原稿の下書きなどに費やし、それからやっとワープロを打って完成となりました。

ものを書くときは、専門家ならいろいろとそれなりのルールがあろうと思います。ルールも知らず、文章力もない私には大変な苦痛となり、思うことの半分も書けなくなり、遂には下手は下手なりにと、何でも思った通りに書いてみようというので、そして出来上がったのがこれです。

何しろ素人の私が自己流で書いた手探り、手作りの素朴な小冊子です。内容についても種々ご批判もあらうかと思いますが、『老兵の綴り方』と思つてお読みいただければ望外の喜びでございます。

手記の中には、お名前の間違つている戦友の方もあると思います。また、昔の軍隊の好（よしみ）で呼び捨てで書いてある方もありますが、それらも合わせてご寛容下されば幸いと存じます。

現在、戦争を知らない日本の世代は『平和』の尊さ、ありがたさを忘れていたのではないかと考えさせられることがあります。『平和』は天から授かった

ものと思ひ込んでいたのではないでしようか。この『平和』をかちとった陰には、私達の戦友の尊い犠牲があったからこそというのを、声を大にして叫びたいのです。

そして、今なお極寒のサハリンの旧国境の永久凍土の下に、野ざらしのまま眠る六〇〇名の戦友の慟哭（どうきう）が、悲痛な叫び声が、北風の哭き声と共に、今も夢の中に聞こえてきます。戦争は二度と起こしてはならないし、させてはならないと、今日も念じながら……。合掌

—— 完 結 ——

☆ ☆ ☆

この『老兵の綴り方』は、戦闘を体験した橘さんの渾身の力作です。橘さんは昨年、万感の思いを胸にお亡くなりになりましたが、早くから原稿をいただいております。今後の『せたかむい』発行のことを想定しながら、区切りをつけたいと途中増ページして、ここに遺稿を完結することができました。故人のご冥福をお祈りし、皆様のご愛読を感謝いたします。

オールトピックス 二月号 (昭和十四年)

——博徒奇談——

新講談 北海水辭伝

積古丹の仙北殺し

2



三水院 西五郎

月下に白刃を合わせている仙北は宿に引き返して女房のキクに長脇差と足袋を出させ、身支度の上で幸次郎に家に馳せつけた。幸次郎も秘蔵の業物を出して仙北の来るのを待っていた。

「種田いたッ」

「何をこの畜生め」

幸次郎は表に一步踏み出した時、

仙北の横に払った一刀が幸次郎の太ももを五寸ほど切りつけバツタリと倒れてところを、

「野郎くたばれッ」

と斬りつけた。仙北は右の腕を斬り落とすつもりだったが酔っているので手許が狂い、石にガツチリと斬りつけて刃先が五寸ほど刃こぼれした。起き上がろうとした幸次郎に仙北は、

徒の魂は持ち合わせていた。

「相手は全く何者かわからねえんですが、理不尽にも俺の家に斬り込みやがった。それでこんなになりました」

と仙北のことは言わなかったで仙北は検挙されなかった。

幸次郎は傷の手当てを終えると女房や子分の止めるのもきかず、業物を腰に仙北の泊まっている宿屋に押しかけ表戸をドンドンと叩き仙北を呼び出した。もし仙北が

野東村の叔父の家に行っているのを知ったら野東村まで追って行つたかも知れないのだ。イヤ幸次郎というのは相当に凄い奴です。その時仙北の女房が二階から顔を出し、

「今何時だと思っているんだい、仙北はまだ帰ってないから用があつたら明日来てもらいますよ」

と持ち前の姐御趣味で芝居がかつたような返答を下の幸次郎に投げつけた。幸次郎は残念でならなかったがふしようぶしように引き上げた。夜は深々と更けて家々は喧嘩のとぼつちりをくわぬよう戸を固く閉めている。

その翌日のこと、野東村の叔父の家に駆け込んだ仙北は、幸次郎に野東か来岸の浜で二人だけで真剣

勝負をしようと決闘状を送った。

幸次郎も男だ一戦を覚悟したが、仙北には剣術のたしなみがあつたから幸次郎にはどうも苦手だった。その内にこのことが諸方に知れると双方を説き伏せる者がいてとにかく円くおさまった。

このことから兩人の交わりは元に戻つたようだったが、幸次郎は太ももを斬られてから仙北を生かしておけない奴とその機会を狙っていたようだった。

明治二十六年八月二日のこと、余別村から十五、六町離れた来岸村の山の上に山口善助という刺網漁師が居たが、その一軒家で博打をするから来てくれと仙北に使いをやつた。この時仙北は女房のキクが病気で、折角だが私が病気だからと断つたらと言つたがそれを聞かずに出かけた。

こゝに仙北を誘い出したのは幸次郎の刺しがねで裏ではちゃんと計画が出来ていた。幸次郎一家の者と仙北とが山口の一軒家に着いたが客は誰も来ていなかった。来るはずはなく博打にことよせて仙北を眠らせようという魂胆であつた。このことは子分にも知らせなかったとみえて、数人の子分は有川熊五郎

という元は能登屋良吉という親分だったが、今は足を洗って餅屋をしている家に行き餅やそうめんなど好きな物を注文して食べていた。仙北も一緒に行くつもりが何か朝から体に寒気がし、治まったと思っていたら昼頃になって熱が出てきたようなので、お前らだけで行ってくれとそこで横になって休んだ。

子分達は間違いの起こることなど夢にも思わないから、下の餅屋で来るはずのない客を待ち合わせていた。すると余市の本間栄吉の若い者で久公という男が駆け下りて餅屋に飛び込んで来た。

「タタ……！ タタタタタタッ」

ひどいドモリでそれに息せき切って駆け込んだので言うことがちつともわからない。

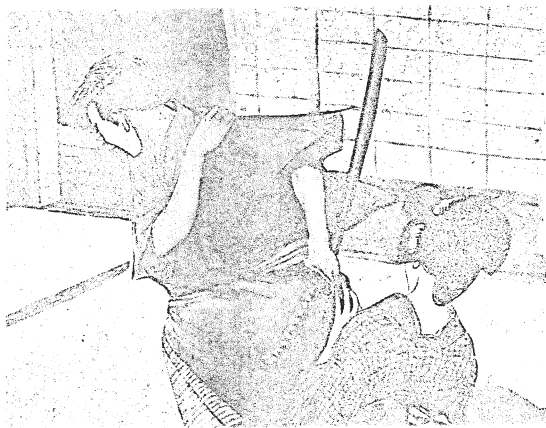
「どうしたつてんだ」

「タタ大変だ、セ……セン……」

その内に本人も気がついて手真似で仙北と幸次郎が和解した今日、幸次郎が仙北をやる訳はない。もう一人神田川という相撲取り上がりがあるが、これは中風のような病気で左半身がきかない奴だからまさかこいつに殺されるような仙北でもあるまい、しかしこいつの言うことは合点がいけないが、ともかく

人が一人死んだのだから行つて見ようということになった。

餅屋から出た一同が現場に着いて見ると、仙北は最初横になった時と同じように寝ているが、その辺り一面は鮮血に染まって、仙北は苦し気で尋常の息じゃない。仙北は両手でしつかり腹を押さえていた。



「仙北どうした」

「神田川と幸次郎にやられた、とても助かる見込みはない。病気で自由にならないところへ野郎がつけ込んで来たのが口惜しい」

両手をとって見ると臓腑が露出して血がとうとうと流れている。傷口を見ると突き刺してえぐったもの

のらしく、このほかにも左の肩口を切られてバツクリと口が開いている。始めに手に一刀を見舞われ、二の太刀を受けた時手でつかんだと見え手にも大した傷を負っていた。

医者を呼んで手当てを加える一方余別の駐在所に訴え出た。病院といえは古平に行かねばならず、戸板に乗せて送るとしても多数の人夫がいるし時間もかかる。そこで三半船(さんぱせん)に乗せて古平に送ることになった。

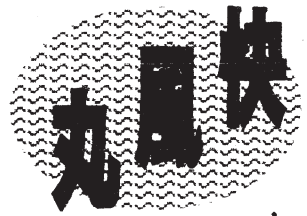
余別の巡査駐在所に届け出ると巡査が出張して不在だったので、管区違いの駐在所から若生巡査が来て仙北のことを調べ、加害者が幸次郎と神田川こと関川浅吉の二人であることを確かめた。幸次郎と神田川は仙北が死んだものと安心して自宅に引き揚げ、一、三十人の子分を集めて長脇差十数本をふすまに立て掛け、仙北の子分が押し寄せて来たら一戦を交えようと支度をする。

子分らはビールを茶碗であおつて、巡査なんぞが来やがったら斬り倒してくれと当るべからざる大気焔である。若生巡査は当時血氣の青年巡査であつた。ただ一人でこの場へ乗り込んで、抵抗して親分を渡

すまいとする子分らを屈服させて幸次郎と神田川を逮捕しました。大津事件の署長のように警察署内で殺人行動を黙認するような意気地なしと較べると、若生巡査の果敢な武士道精神がしのばれて嬉しい。

仙北は三半船に乗せられて古平病院に入院したが四、五日目に絶命しました。この時仙北は三十八歳だとのこと。仙北が幸次郎らのために眠らされたことが古平の子分たちや関係者に知れると、幸次郎もロクなものではないが仙北も仙北だと縁の遠い者は簡単に話を片付けたが、身内はそんなことは言っていられない。数頭の馬にまたがって長脇差を背負つて余別を指して乗り込んだ。

警察権の行き渡らない頃ではあったが彼等の乱暴ぶりは目に余るものがあつた。加害者の種田幸次郎と神田川の関川浅吉は札幌地方裁判所で懲役各十一年の刑を言い渡された。幸次郎は不服で控訴したがどうしたことが翌年九月に無罪になつて無事に余別に帰つた。仙北の女房キクはその後親分の北澤金蔵の家内になつた。子分の女房をなにも自分の女房にすることはないだ(= 20ページ3段目へ続く)



——黄門さんの建造——

先号に続いて その後のこと

先月号で標題の『快風丸』のことについて書きましたが、その後の資料で新しいことも分りましたので、追加や訂正をする意味で再度紹介をします。

◇ ◇ ◇

帆や櫓(かい)などで進む、日本の昔からの船は和船といわれている。何年か前に『北前船』が江差に來航したいうので大変話題になり、江差の港は大いに賑わったことがある。この時は船の安全が確保されないという理由で、昔の北前船の航路を機船に引かれて大阪からやつて來た。

この航海に使われた北前船(船型は弁財船Ⅱべさいせん)を復元するのに、詳しい設計図が残されていなかったのでも苦勞し

たという。それもそのはず和船を造る技術にはそれぞれ流派があつて、建造の大事などころは秘伝と称して弟子にも簡單には教へなかつた。それに当時の資料はほとんど無く研究者も困っていると聞いたことがある。

ところで『快風丸』だが、当時としてはとてもない大きな船であり、莫大な費用をかけて造つたのに、残された史料は「快風丸涉海紀事」などというごく簡單なものしかなく、外のことから推定するしかないのが現状のようである。

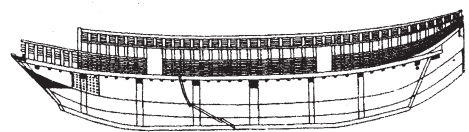
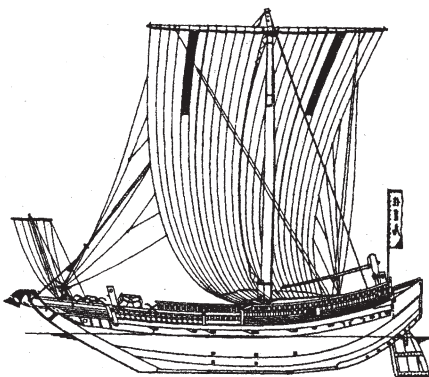
その史料である「快風丸涉海紀事」という本だが、名前の紀事という字は本来記事が正しいのだがその本では紀となつている。快風丸を紹介した本は多いが、ほ

とんどの本は史料名を紹介するのに記と書いてある。

日本の和船の研究で有名な石井謙治さんの説から——

快風丸の建造にはわざわざ大阪から船大工を呼び寄せたこと、船の大きさは全長二十七間(現在の一間Ⅱ一・八びで換算すると五十三び)・幅九間(十六び)・櫓の数六十丁(蝦夷地へ行った時は四十丁)・帆柱の長さ十八間(三十二び)・帆には木綿五百反を使つたという程度しか書かれていないので、どんな型の船だったのかは推定するしかないというが、その前に探検用として建造した船の

← 北前船と呼ばれ、蝦夷地に多く來航していた弁財型船



↑ 快風丸と同じ船型と考えられる伊勢船の図面

ことや、当時の造船技術から見ても伊勢船型であることは間違いない。この型の船は何よりも頑丈で、快風丸が大あらしに合いシベリア方面まで流されたが無事であつたことから分るという。

ところで船の大きさだが、全長二十七間といえ、当時の一間は六・五尺なのでこれだと五十三びにもなり、これから計算すると約一万二千石という驚くべき巨船になり、実際の品物を積んだ時の石数は六割程度としても七千二百石になる。

蝦夷地探検といういうことに

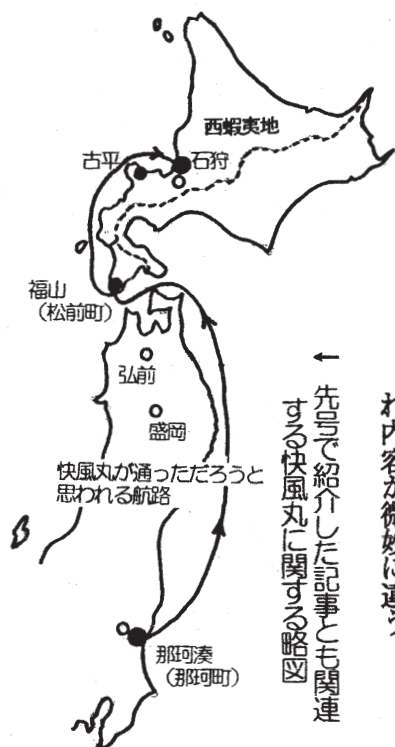
なると、動きが鈍く、行動の自由を欠くこのような巨船は適当ではないと考えられる。そこで記録にある寸法だが、二十七間ではなく二十七尋(ひろ)五尺だとすれば、全長は四十・九びとなり、計算では五千六百石、実際に積める石数は三千三百石となる。この程度なら伊勢型船としてありそうだ。

江戸時代の船具のことについて書かれた本の中に、「三千石の船の帆の大きき三十二反、補助の帆八反を含めて木綿五百反を使った」とあるから、これだと快風丸の帆木綿五百反とほぼ合う。このように快風丸を三千石積み級の船だとすれば構(こ)う四十

丁はちようと力不足だが、何とか行動できるだろう。それに七千両の建造費がかかったというが、一万二千石の船だと少ないが三千石級だと妥当なところで、この推定も確実性が高いというものではないだろうか。

歴史上でも、物語の世界でも超有名人である水戸光圀が計画したという快風丸の探検は、多くのの人から大変興味と関心を持たれたのは当然で、いろいろな本に書かれたり引用されている。一般的な読み物としては、古いものでは『北方文明史話』、ごく新しいものでは『石狩百話』(石狩市、北海道大百科事典、大日本百科事典などなどあるがそれぞれ内容が微妙に違う。

→ 先号で紹介した記事とも関連する快風丸に関する略図



(← 18ページ下段から続く)
ろうと、金蔵一家に対する非難が高まり子分らの中には盃を返して去る者が多かった。

明治二十八年頃までは仙北の子分が幸次郎を付け狙っていたので、古平の分署では博徒の退去を命じ応じない時には容赦なく浮浪罪として処分した。その結果、子分らも何時しか敵討ちを断念して離散してしまつた。

幸次郎はその後ますます評判が悪くなつて、明治三十八年の賭場の間違ひから相手を殴つて検挙され、監獄(かんごく)刑務所に送られたがそこから出ると家宅侵入罪とか賭場の現行犯などで三回も続け検挙されたので、さすがの幸次

郎も弱り切つて鍼刺網など始めて正業についたが元来が博奕(ばくち)打ちである、明治四十年二月に小樽でまたも賭博の現行犯で検挙され、それで何度目かの監獄入りを繰り返してどうやら出獄したが、今度は親分ともあるう者が窃盗罪に問われて六年の刑を言い渡されました。

こうなつては遊び人社会でのクズでしょう。地下の仙北もこれを知りたらず笑っていることでしょう。

古平墓地にあつて誰にも顧みられないこともない墓ですが、新開地だった頃の世相を映して今に伝えています。興味と関心のある方は訪ねられては如何でしょう。 完

【訂正】折り込みの《怒濤》二月号・句と作者名を取り違えておりましたので、お詫びし次のように訂正いたします。

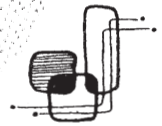
この道は親の代より初詣を
船霊に古老洩くも舟唄を
凍月や岬の飛沫をまとひ消ゆ
口ぐちに闘志みなぎる春隣
海原を眼下に眺め年忘
野も山も墨絵のごとし冬景色
中天に青く凍れる星仰ぐ
冬さうび一輪にある夜の艶

本間 寿昭
室谷 弘子
外山 俊久
堀 典子

編集雑誌に寄せて――

あなたは

おはぎ？ ぼたもち？



大分前の編集雑誌でおはぎとぼたもちの名前を出したところ、おはぎとぼたもちは同じものか違うものなのか――などなど聞かれることがありました。古平ではおはぎとぼたもちの呼び名は半々くらいのようになっています。

うる覚えで、どこかで聞いたか本で見たことがあったようだがと、夜長のんびりとあちこちの本を開いて見たところ、それほど簡単なものではないことに気づきました。ざっと見たところをまとめてみました。

◇ ◇ ◇

間もなく春の彼岸ですが、この頃は忙しかたの外に楽しむことが多くなつたのか、地域の伝統もすっかり影をひそめてしまいました。

戦前だと彼岸といえはおはぎを思い出します。おはぎは萩の餅・萩餅（はぎのもち・はぎもち）の女言葉で、おをつけて三音以下を略した形は、さつまいもをおさつというのと同じですが、なぜあの食べ物に萩餅といわれたのでしょうか。日本のあんのお菓子は、あんが包み込まれているものが多いのに、おはぎはあんが外側についている点が珍しい。

遠く江戸時代からモチ米とウルチ米を半々にして炊いたり蒸したりしてから、すり鉢でざつとまぜてだんご状にまるめて、あんや黄粉をまぶして作りました。

ところがこのおはぎは、江戸の昔からかなり軽べつされていたようで、元禄の頃の本には

「民家の食物で貴人はめつたに食べない。身分のある客には出さないものである」

黄粉をまぶしたのは萩の花に似ている感じから萩餅・萩の花、あんを付けたものは牡丹（ボタ）に似ているのでぼた餅だといわれていますが、これには異説もあります。江戸時代（今から三〇〇年ほど前）に発刊された百科事典を兼ねたような図鑑（和漢三才図会）があります。

それには、「炒った豆の粉をまぶして黄色にしたり、小豆のあんをまぶして紫色になるので牡丹餅、萩の花の形や色から萩の花――どうして夜の舟というのかは知らない」ということが書かれています。

『和漢三才図会』の中にある「牡丹餅・ぼたもち」の説明
→ 重箱の中のおぼたもちはずいぶん大きく見えます

いてあります。

また、これも今から一八〇年ほど前の随筆ですが、当時の風俗や習慣をたくさん書きとめた本があります。（嬉遊笑覧）これを見ると、「萩の花というのは今のぼたもちのことであり、ぼたもちを牡丹餅と思っていたがそうではない。ぼたもちと言えは萩餅のことで、おはぎとなじである」

このことは、
サツマイモ・オサツ
ハギノハナ・オハギ

どちらも上の二文字をとって、それにオをつけた名前になっています。

昔の人はシャレ言葉が好きで

牡丹餅
保太も加
波岐乃波奈



△ 牡丹餅以梗糯米相雜炊飯以雷釜野櫻樹之模
手爲圓餅糠炒豆粉爲黃或粉赤小豆泥爲紫也所謂
牡丹餅及萩花者以形色名之今人隱名爲夜舟言不
知其舊也又名主之連歌言雖不陷用之與與同



龍 内 優 子

船入瀬へむ発破の許可祖父願ひ出ぬ海軍省に
大正の代なり幾たびの接待に手にせし許可書が金庫より出す
幾年を経て手に得たる許可書か遠き日に祖父の膝にて開きぬ
金槌に発破のあとの海石砕き祖父は船入瀬へしとふ
口笛を吹く歌ふな風呼ぶと祖母きびかり出漁の日は
船倉の二階に海へ向ふ部屋ありて入り舟見張りしところ
船瀬よりつづきて建てし舟倉を遊び場として我らたむろせる
メンコ独楽モッコの中に隠し置き親の目避けし女わらし我は
舟倉の天井に吊るす大たものの中にひそみき鬼ごっこすと
船瀬みな埋め立てされし荷場に賑ひ見する出船入船

したから、おはぎ・ぼたもちのことを「夜の舟」、「隣知らず」、「奉加帳」、「北の窓」などとナゾめいた言葉で楽しんでいました。先の本の中で夜の舟のことは知らない—とありましたが、その意味は「夜舟」暗いのでいつの間に着く（搗く）のか知れない—という意味で、舟の着くのと、餅の搗くのをつくという言葉（掛けことば）で表したものです。普通の餅搗きだと音が響きますが、おはぎはすり鉢でこねるのが静かなので搗くのがわからない。

おはぎとぼたもちは、元は別なものでしたが、現在は同じものとして通用しています。しかし、見た目の感覚から季節的に春から初夏の頃作られるのはぼたもち、秋になつてからはぎのもち（おはぎ）、人によっては花札の牡丹が春なのでぼたもち、これは俗説でしょう。

古平では、黄粉とあんをまぶしたものは区別して、黄粉をまぶしたものをおはぎとは言わなかったようです。黄粉を使うのはご馳走でしたから「黄粉ご

飯」とか言っていました。

青森では、握ったご飯を容器に入っているあんの上にのせて、手前（ころ）ころ転がしてあんをつけるので、「手前ころがし」といい、春・秋の彼岸には団子と手前ころがしは欠かせないものでした。こういう行事は、仏教国である日本では全国的に行われていることです。

春分・秋分を中日（ちゅうにち）として前後三日の七日間が彼岸ですが、その日は太陽が真東から出て真西に沈むので、昔から信仰の対象にされてきました。仏教でも彼岸会（ひがえ）の行事があります。

昔は彼岸になると、隣近所や知り合いにおはぎを配ったり貰ったりするのが習慣でしたが、今は彼岸に限らず、そうした家庭的な付き合いが薄れてきました。

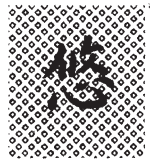
俳 句

妻の手に玉と育てり彼岸餅

林昌華

命婦よりばた餅たばす彼岸かな

蕪村



雑誌詠 (三月号)

主宰 水見 壽男

瀧しぶき浴びつ仰げる秋の瀧

越野 清治

神の山揺さぶつてゐる那智の瀧

行秋を松籟に聴く伊勢の旅

秋雨の熊野古道に憩ふかな

秋晴や浄めの音の五十鈴川

【句評】

逆縁を聴きて涙す秋の暮

山口 悦子

目に余るほどの全山紅葉かな

波音を子守歌とし山眠る

風の吹く夜は帯も畳まずに

冬もみじ惜しみなく溪深く燃ゆ

越野 敏雄

大鷲の天翔ける岬波しぶく

オホーツクのみ空を制す尾白鷲

冬に入る閨に海鳴り轟けり

冬告ぐる海鳴り一夜をさまらず

高橋 重子

風に舞ひ風に置かれし冬紅葉

石路の花雲の動かぬ昼下り

冬の雷寝つけぬままに夜の更けぬ

赤蜻蛉飛んで夕日にとける村

クラークの銀杏落葉が美しい

冬晴や増毛連山目の前に

燃えつきて別れの近し冬紅葉

冬空にひびく波音夜を揺らす

海の面を染めて冬日の傾ける

さらさらとさらさらと落葉かな

【句評】

落陽に彩る沼や鴨の陣

本間 寿昭

この時化を漁場に発つ船神の留守

ひと筋の潮目を探る鮪船

黒鮪跳ねる潮目に船煙る

浜風の歪みしままに冬来る

渡辺 嘉之

冬めきて風に急かざる雲ばかり

しがみつく日をふり解く冬の雲

冬立ちぬ風の便りはいつも岬

【句評】

船頭衆酔つて鰯つり音頭かな

室谷 弘子

立冬の波に挑みし大漁旗

立冬と言へる風音一途なる

落葉果て済に稜線迫り来る

【句評】

外山 俊久

堀 典子

怒涛

〔二〇〕

—三月号—

古平俳句会

雪しまきつつ白樺をさりにけり 越野清治

空のもの地のもの凍てて匂ふ闇

初鏡美しく年重ねたし 斉藤波留

寒の水吞んで卒寿を重ねたし

煮凝を二等分して食卓へ 山口悦子

ばたばたと濡れしバックの雪払ふ

雪雲に連山既に抱へられ 越野敏雄

客寄せに一役かつて雪だるま

冬囲いっしか孫も手際よく 大和田絵伊

ハワイ子に電話の知らず冬至かな

離れ居し娘と分かちあふ初明り 高橋重子

冬山へ光のつぶてなす雀

海原を眼下に眺め年忘 外山俊久

野も山も墨絵のごとし冬景色

中天に青く凍れる星仰ぐ 堀典子

冬さうび一輪にある夜の艶

この道は親の代より初詣 本間寿昭

船霊に古老洩くも舟唄を

初凧や海上々の出船かな 渡辺嘉之

雪原に閉じ込められし風の音

凍月や岬の飛沫をまとひ消ゆ 室谷弘子

口ぐちに闘志みなぎる春隣

松風の音を拾ひて初手前 仲谷比呂古

お互ひに勇気をもらひ年明ける



吉平岬短歌会

前浜の沖に連なるイカ船の灯りは水平線の空を焦しぬ

池田 テル

真つさらの暦手にして想ひしは刻をみつめてゆつたり生きたし

金子 寿子

シクラメン窓辺に二鉢置いて今日光を受けて蕾ふくらむ

坂本 信子

婆ちゃんの脳活性のためと言ふ孫とトランプの札捲りあふ

鈴木 時子

こんなにも静かな刻もあつたかと只ぼんやりと今を過ごしぬ

田中 香苗

岸壁の崩れし跡を埋めつくす氷柱に吹雪く事故の忌近し

丹後 初江

残る世も健やかなれと念じつつ山を染めたる初日を拝む

東 美知

北風の吹きつぐひと日雪となり飛び散り散りて町に積みたり

堀 典子



吉平俳句会

笹鳴やかばそき音の風匂ふ

越野 清治

句を学び生きる楽しみ去年今年

斉藤 波留

雪止んで静かな庭となりにけり

山口 悦子

初漁や馴染み同士の訛言かな

越野 敏雄

幾年の漁師魂失せ師走

大和田 絵伊

荒波と風の音にも春隣る

高橋 重子

古稀過ぎて月日の早し年の暮

外山 俊久

寒月や夜の音遠くきしみけり

堀 典子

初明り心で捲るうた暦

本間 寿昭

雪零る雲と雲との透間より

渡辺 嘉之

寒晴や蒼さ際立つ空と海

室谷 弘子

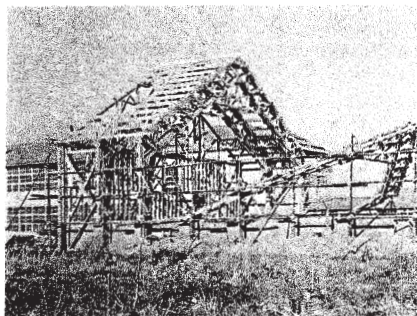
明治より母の声聴く三ケ日

仲谷 比呂古

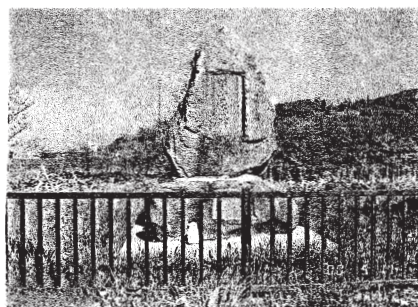
古平町史年表

昭和30年 (1955) ~ 続 き

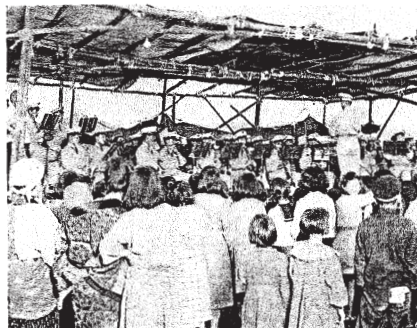
- ▲失業対策としての浜町排水路工事が完成する
- ▲道道入舸・神恵内・古平線が開発に必要とされる道路に認定される
- ▲探検家菅野力雄が来町し、講演会を開く
- ★古平中学校体育館が竣工する
- ★古平川改修延長分の工事終了で改修工事が完成し、「治水記念碑」を建立する(題字は田中敏文知事の揮毫)
- ▲積丹地方開発振興会総会が古平町役場で開かれる
- ▲湯内トンネル付近でバスの転落事故があり、乗客40名の内30名余りが重軽傷を負う
- ▲浜町外5町内会が特別清掃地域に指定される(住宅周辺や道路の清掃、排水溝の管理などを町内会で行なう)
- ▲豪雨による増水のため廻り淵橋が流失する
- ▲古平林産物検査員詰所が新設される
- ▲鉄興社社長佐野隆一が稲倉石鉱業所を視察のため来町し、町長らと懇談する
- ▲稲倉石小学校開校20周年記念式と祝賀会が行なわれる
- ▲海岸道路建設中の歌葉村で崖崩れにより、作業中の小枝豊二・船水松三郎の二人が土砂に埋まり死亡する
- ▲戦後間もなく開催され中断していた古平地方挽馬競技大会が中島グラウンドで開催され、馬券も売り出されて大勢の観客で賑わう
- ▲工事中のセタカムイ隧道で崩落事故があり、交通が一時途絶える
- ▲丸山町に建設された授産所静和寮が、生活保護施設として認可される
- ★自衛隊北部方面音楽隊の今関隊長以下45人が来町し、街頭行進とみどり公園で音楽会を開く



↑ 最新のジベル工法による建設中の古平中学校体育館



↑ 古平河畔に建つ治水記念碑
(B&G海洋センター裏に移築)



↑ みどり公園特設舞台で演奏
多くの聴衆が集まる

お 知 ら せ

先にもお知らせしましたが、今月を以って古平町史編さん室が閉鎖されます。資料の閲覧などはできませんが、業務として行なってきました『せたかむい』は継続して発行いたしますので、従前のご愛読をお願い申し上げます。今後の発行のことにつきましては、4月号でお知らせいたします。